（二〇一一年度）

4 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は20ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、携帯電話・ＰＨＳの電源は切ること。
三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、筆記具は、**ＨかＦかＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
十、試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

AK-A-04

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

実物にはいっこう感心しない。ところがこの実物がひとたび絵になると、人は実物に似ているといって感心する。世に絵画ほど空しいものはない。

十七世紀のフランスの哲学者パスカルの言葉である。

なるほど、言われてみればたしかにその通りに違いないという気がする。

十七世紀においては、――いや二十世紀の今日においてすら多くの人びとにとって――絵画とは現実の世界を何らかのかたちで反映し、写し出すものであった。[1]それはかならずしもいわゆる「美しいもの」である必要はなかった。無骨な将軍の肖像でも、ありふれた台所の一隅でもかまわない。ただそれが「実物」を髣髴(ほうふつ)させるように描かれてあれば、それで人びとは満足し、感嘆すらしたのである。だが人は、いったい何に満足し、何に感嘆したのだろうか。

同じ将軍の顔を描き出した肖像画が何枚もあるとする。おそらく当時の人びとは、描き出された姿が本物の将軍に似ていればいるほど、喜びもすれば、感嘆もしたに相違ない。現在でも多くの人びとがそのような反応を示す。では、それほどまで本物に似ている方がよいというのなら、紛れもない本物の将軍に出会ったら感嘆のあまり卒倒でもしなければならないところだが、事実はしかし逆であって、本物の将軍に「美的感動」を覚える人はまずないであろう。とすれば、誰からも感心されない将軍の姿のいわば「影」にすぎないその肖像画を、それもそれが本物に似ているからという理由で讃美するとは、何とおかしなことではないか、というのが[2]パスカルの言い分である。

だが[3]人びとが「実物」よりも「影」の方にいっそう惹かれたということは、それなりに理由があったはずである。その理由を探るためには、「実物」と「影」とのあいだに、どのような本質的な差異があるのか、もっと具体的に言えば、[4]「実物」から「影」へと移行する過程において、いったいなにが失われてなにがつけ加えられたのか、それを明確にしなければならない。

失われたものは明らかである。それは、将軍というひとりの人間の持っている物質性、その重み、その実体、現実の世界の中に生きていて、呼吸し、喋舌り、動き廻る存在としての将軍である。もっとも素朴な、もっとも平凡な意味における「もの」としての将軍の存在である。絵画の世界においては、三次元の空間に存在する「もの」としての将軍の実体は完全に失われる。描かれた将軍の姿は、重さも、厚みも、物質性も持たない。[5]「影」はあくまでも二次元の世界にのみ属しているからである。[6]

絵画が、比喩的な意味ではなしに現実の「もの」の影であるということは、絵画の誕生についてプリニウスがその『博物誌』の中で語っているあの美しい伝説によっても明らかであろう。プリニウスの語るところはこうである。ギリシャのコリントスの陶工ブータデスの娘は、自分の恋人が立ち去ろうとする時、何とかして彼の面影を自分のそばにとどめておきたいと思った。そこで娘は、炭を手に持つと、燈火に照らし出された若者の顔が壁の上に落す影をずっと線でなぞって、その相貌を描き出したという。それが世界の最初の「肖像画」であった。それは、文字通り「影」の世界であり、「実物」の不在を補い、「実物」の代りを勤めるためのものであった。

同じような考えは、レオナルド・ダ・ヴィンチにも指摘することができる。彼はその『手記』の中で、

最初の絵画は、太陽によって壁の上に作られた人間の影の輪郭をたどった線にすぎなかった……。

と書き残しているからである。

ギリシャの伝説の娘が壁の上に描きとどめたという若者の肖像は、単なる一本の線にすぎなかった。[7]だがそれが、「実物」の世界の「代り」であり、実物を思い出させるためのものであるとしたら、単なる輪郭線だけではなく、本物の世界に見られるさまざまの性質を備えていた方がいっそう効果的であることは言うまでもない。眼や、鼻や、唇などの細部の描写、柔い肌の色合いやかすかにそれと認められる頬の翳り、豊かな髪の毛のうねりなどをそれらしく描き出せば、「影」はそれだけ「実物」に近くなる。レオナルドは、「影」を「実物」に似せて描き出す技術において、もっとも卓越した腕の持主のひとりであった。しかし

そのレオナルドの《モナ・リザ》でさえ、実体のない「影」の存在であるという点では、ギリシャの伝説の娘のたどたどしい炭の線の跡と何ら変りはなかった。[8]ただ《モナ・リザ》の画面には、いっそう多くの現実の部分がはいりこんでいるだけである。だがいずれの場合においても、「実物」の世界だけが持っている三次元の空間存在としての「もの」の実体は失われてしまっている。

肖像画が、「実物」の世界から何ものかが失われただけのものであったなら、パスカルならずとも「空しい」と思わずにはいられないだろう。「実物」が少しも面白くないのに、それからさらに何かが失われたものが興味を呼び得るはずがない。[9]しかし、《モナ・リザ》は、いやあのギリシャの娘のたどたどしい線ですら、「実物」の世界の持たない別のものを持っている。それは、娘が恋人の面影を描き出したという壁そのものと共通の特質、すなわち二次元の平面としての特質がそれである。

十七世紀の将軍の肖像にも、《モナ・リザ》にも、ギリシャの娘の壁の線にも共通して見られるなにものかがあるとすれば、それはまさに、平面における形と色の世界というこのことであろう。そしてその特質こそが、三次元の空間の中の存在である「実物」と絵画とを決定的に分けるものなのである。

現実の世界と深いかかわり合いは持ちながら、現実の世界とはまったく別の、いわば実体を持たない「影」の世界としての絵画の特性、それをわれわれは「イマージュ」の世界と呼ぶことにしたい。それに対し、先ほどから「実物」という言葉であらわして来た現実のものの世界、[10]それは「オブジェ」の世界と呼んでもよいものであろう。

もちろんイマージュとかオブジェという言葉は、人により、場合により、さまざまな意味に使われる。現代美術においてオブジェといえば、普通、単にどこにでもころがっている「もの」ではなく、何らかのかたちで日常的価値を離れた造形的意味を持った「もの」という特殊な存在を指す。また、ベルグソンやサルトルが、形而上学ないしは心理学の用語としてイマージュと言う時、それは知覚の領域、ないしは想像力の領域における特殊な存在を意味する。しかしここでは、オブジェもイマージュも、そのもっとも平凡な、もっとも一般的な意味で用いることとする。オブジェとは、その語源からも明らかなように、われわれの働きかけや運動に対して「投げ出されたもの」であり、われわれをとりまく外界のさまざまの「対象」、「客観的存在」であ

り、ジャック・マリタンが『芸術と詩における創造的直観』の中で、芸術家の「自己」に対してその「自己」が働きかけるあらゆる存在という意味で呼んだ文字通りの「もの」の世界である。イマージュは、ルネ・ユイグが『見えるものとの対話』の中で二十世紀を「イマージュの文明」の時代と規定したような意味での視覚的映像の世界であり、重さも、厚みも、質量も持たない二次元の色と形の世界である。オブジェが人間の触覚的働きかけを受けとめるものとすれば、イマージュは人間の視覚的働きかけを受けとめるものであると言ってもよい。

とすれば、[11]われわれ人間は自己自身も含めて無数のオブジェの只中にあって、それらのオブジェを主としてイマージュのかたちで把握している存在ということになる。もちろん、人間が外部のオブジェの世界を把握するのは視覚のみによるとはかぎらない。聴覚も、味覚も、嗅覚も、それぞれある程度はその認識作用に参与する。しかし、それらの感覚の中でも、視覚と聴覚はずばぬけて高度に発達しており、特に視覚はそうである。

（高階秀爾『20世紀美術』）

〈注〉 プリニウス…古代ローマの将軍・官吏。

ベルグソン…一八五九～一九四一。フランスの哲学者。

サルトル…一九〇五～一九八〇。フランスの文学者・哲学者。

ジャック・マリタン…一八八二～一九七三。フランスのカトリック哲学者。

ルネ・ユイグ…一九〇六～一九九七。フランスの美術史学者。

問一　傍線部1について、筆者がこのように考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　絵画は、現実の世界における問題点を表現していれば、人々を感心させたから。

b　絵画は、身のまわりの「実物」が持っている豊かさに気づかせてくれれば、人々は喜びを覚えたから。

c　絵画は、現実の世界に見られる驚きを提出していれば、人々は満足したから。

d　絵画は、「実物」に似ていれば、人々に感動を与えるものであったから。

問二　傍線部2について、筆者の考える「パスカルの言い分」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　本物に感心しないのに、その感心しない本物に似ていることで本物でない絵に感心するのは、矛盾しているということ。

b　本物がどういうものか分かっていないにもかかわらず、それが絵に描かれると似ていると思うのは、矛盾に気がついていないということ。

c　本物に似ていることを追い求めることが喜びであるならば、絵に描かれた似ているものよりも本物に会って喜びを得た方が合理的であることに、気づいていないということ。

d　本物に「美的感動」がないことが分かっているにもかかわらず、本物に似た絵に「美的感動」を求めるのは、ないものねだりであるということ。

問三　傍線部3について、ここにおける「影」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　美的感動
b　肖像画
c　本質
d　物質性

問四　傍線部4について、〈「実物」から「影」へと移行する過程〉とはどのような過程か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　事実から「美的感動」へ移行する過程
b　具体的なものが本質的なものへ移行する過程
c　三次元から二次元へ移行する過程
d　平凡なものが意味のあるものへ移行する過程

問五　傍線部5について、「あくまでも二次元の世界にのみ属している」とは具体的にはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　本物の将軍が持っている物質性を有していないということ
b　生きたひとりの人間として将軍が存在しているということ
c　実体を持つ将軍が平凡な意味においてしか存在しないということ
d　現実の将軍がその本質的なものを露呈しているということ

問六　傍線部6〈絵画が、比喩的な意味ではなしに現実の「もの」の影であるということ〉とは、具体的にはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　リアルに人物の面影を思い浮かべること
b　実際に人物などの影をかたどること
c　人物などを燈火で照らしてその影を作ること
d　映し出された人物の影に現実の人物を感じること

問七　傍線部7について、次の問に答えよ。

A　〈「実物」の世界の「代り」〉に相当するものを、次の中から一つ選べ。

a　「実物」の性質を再現すること
b　「実物」の物質性を取り込むこと
c　「実物」の細部を克明に描くこと
d　「実物」の不在を補完すること

B　「効果的である」とは、何に対して「効果的」なのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　本物を想起することに対して
b　実物を手に入れることに対して
c　本物を発見することに対して
d　実物を讃美することに対して

問八　傍線部8について、「現実の部分」とはどういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人物が持っている内面
b　人物の輪郭の正確な再現
c　人物の顔や身体の細かい要素
d　人物の顔の陰影

問九　傍線部9について、〈「実物」の世界の持たない別のもの〉とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　現実の「もの」の世界
b　伝説の世界
c　三次元の世界
d　イマージュの世界

問十　傍線部10について、筆者の言う〈「オブジェ」の世界〉とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　私たちが触覚的に働きかける対象としての「もの」の世界
b　日常的な価値を離れた造形的な意味を持つ「もの」の世界
c　重さや厚みなどを持たない色と形によって構成された世界
d　知覚や想像力によって捉えられた「もの」の世界

問十一　傍線部11について、「それらのオブジェを主としてイマージュのかたちで把握している」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　視覚の対象としての「もの」を、主に触覚の働きかけによって受容しているということ。

b　造形的意味を持った「もの」を、主に知覚や想像力によって受けとめているということ。

c　「実物」と呼んできた「もの」を、主に高度に発達した聴覚によって捉えているということ。

d　触覚的に捉えられる「もの」を、主に視覚的なもので受け取っているということ。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

俊頼の歌に云はく、

信濃なる木曾ぢの桜さきにけり風のはふりにすきまあらすな

これは、信濃の国は極めて風早き所なり。仍りて諏訪の明神の社、風の祝と云ふ物を置きて、これを春の始めに深き物に籠め居ゑて、[1]祝ひして百日の間尊重するなり。然れば、その年はおよそ風閑かにて、農業の為に吉きなり。[2]おのづからすきまもあり、日の光も見せしめつれば、風納まらずと云々。その意なり。これは能登の大夫資基と云ふ人、俊頼に語りて云はく、「[3]かくの如き事承り候。歌に詠まんと思ふなり」と。俊頼答へて云はく、「無下の世俗の事なり。かくの如き事、[4]更々詠むべからず。不便なり」と云々。仍りて[5]その由を存ずるの処に、後日詠むなり。尤も腹黒の事か。[6]五品後悔すと云々。

ある人語りて云はく、「先年人々和歌を詠ず。而して基俊の公、片方に寄りて深く思ひ染め、感気して高声に詠じて云はく、

[7]めざましきまで散る紅葉かな

と云々。顕仲入道聞きて、傍に在る馬助某和歌成り難きの由を歎くに教へて云はく、「早くこの句を取りて元句を構ふべし」と。馬助[8]教訓の如く元を構へてこれを献る。披講の処、[9]馬助下臈たるによりて先づこの歌を講ず。時に金吾、大いに興違ふの気有り。入道微笑す。その後金吾の歌を講ず。これを聞きて入道云はく、「[10]馬助こそ参り寄られにけれ」と云々。[11]金吾いよいよ不請の気有り」と云々。[12]用意すべき事か。

（『袋草紙』）

〈注〉○俊頼－源俊頼（一〇五五～一一二九）。『金葉和歌集』撰者。　○祝－神職の総称。神主・禰宜に次ぐ神官を指すことが多い。　○能登の大夫資基－藤原資基（生没年未詳）。一一三五年ころ出家。法名蓮禅。著書に『三外往生伝』。　○五品－五位の中国風の称で、資基を指す。　○基俊－藤原基俊（一〇六〇～一一四二）。俊頼と双璧をなす大歌人。　○顕仲入道－

藤原顕仲（一〇五九～一一二九）。一一二〇年出家。　○馬助－馬の助。馬寮の次官。　○金吾－衛門府の中国風の称で、基俊を指す。

問一　傍線部1「祝ひして百日の間尊重するなり」とあるが、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　諏訪明神の「風の祝」という神職を、百日間、山中深くに監禁して、祈禱させないようにした。

b　諏訪明神の「風の祝」という神職を、山中深くに籠居させて、百日間の祈禱を続けさせた。

c　諏訪明神の「風の祝」という神職を、百日間、神として祀りあげて、人々に参拝させた。

d　諏訪明神の「風の祝」という神職は、春の初めの百日間を尊重して、誰も任用しなかった。

問二　傍線部2「おのづからすきまもあり、日の光も見せしめつれば、風納まらず」とあるが、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　自然に「すきま」もできるので、太陽が射し込んで来るから、そうなったら風はおさまらないかもしれない。

b　偶然に「すきま」があったりすると、そこから太陽が射し込むこともあるから、その時は風がおさまらない。

c　いつのまにか「すきま」ができて、太陽も射し込むものだから、それでは風はおさまらないことになる。

d　もしも「すきま」ができて、太陽が射し込んだりしようものなら、風は決しておさまらないだろう。

問三　傍線部3「かくの如き事」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　俊頼の歌に「風の祝」の神事が詠み込まれていること。

b　俊頼は信濃の桜が風に吹き散らされやすいと詠んだこと。

c　諏訪明神は農業のために風が穏やかなよう祈禱していること。

d　諏訪明神は「風の祝」の名歌によって桜をめでていること。

問四　傍線部4「更々詠むべからず。不便なり」とあるが、なぜ歌に詠んではいけないというのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　神聖な神事を歌などに詠んだら、せっかくの祈禱の支障になるから。

b　とんでもない俗説に過ぎないので、それを詠んだら歌の品格が下がるから。

c　すでに自分が歌に詠んでいるので、盗作にあたるから。

d　豊作を祈願しても、和歌の力では到底実現できないから。

問五　傍線部5「その由を存ずる」とあるが、どうしたのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　俊頼の返事を真に受けて、「風の祝」の神事を歌に詠まなかった。

b　俊頼の返事を真に受けて、後日「風の祝」の神事を歌に詠んだ。

c　俊頼の返事をよく理解して、諏訪まで「風の祝」の神事を見に行った。

d　俊頼の返事をよく理解して、「風の祝」の神事に自分も参加した。

問六　傍線部6「五品後悔す」とあるが、なぜ後悔したのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　俊頼に「風の祝」の神事を教えたために、自分が詠んだ歌を盗まれてしまったから。

b　俊頼の意地の悪さを見抜けなかったために、詠もうとした歌を盗まれてしまったから。

c　俊頼の和歌の知識を軽んじたために、自分が詠んだ歌を理解してもらえなかったから。

d　俊頼に自分が詠んだ歌を教えたために、「風の祝」の神事が有名になってしまったから。

問七　傍線部7「めざましきまで散る紅葉かな」とあるが、どのような心情を表現しているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　紅葉が散ってゆくのを、ただ茫然として見守っている。

b　紅葉が散ってゆくのを、悲歎に暮れながら見つめている。

c　紅葉が散ってゆくのを、実に美しいと目を輝かしている。

d　紅葉が散ってゆくのを、自分の行く末と重ね合わせている。

問八　傍線部8「教訓の如く元を構へてこれを献る」とあるが、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　入道から教えられたとおり、自分で上句を付け、和歌を完成させて提出した。

b　入道から教えられたとおりに上句を付け、自分が詠んだ和歌として提出した。

c　入道がいつも詠むように上句を付け、和歌を完成させてから、基俊に贈った。

d　基俊がいつも詠むように上句を付け、和歌を完成させてから、入道に贈った。

問九　傍線部9「馬助下蔦たるによりて先づこの歌を講ず」とあるが、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　馬助は身分が低かったので、基俊よりも先に馬助の歌が披露された。
b　馬助は身分が低かったので、馬助よりも先に基俊の歌が披露された。
c　馬助は身分が低かったので、まずは馬助の歌が批判の対象になった。
d　馬助は身分が低かったので、まずは基俊の歌が批判の対象になった。

問十　傍線部10「馬助こそ参り寄られにけれ」とあるが、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　馬助の歌はあなたのお手元に届きましたか。
b　馬助の歌はあなたのお気に召しましたか。
c　馬助の歌はあなたの歌に似てきましたね。
d　馬助の歌はあなたの歌より上出来でしたね。

問十一　傍線部11「金吾いよいよ不請の気有り」とあるが、なぜ気分を害したのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　馬助と下句が一致したのは偶然であると判明したから。
b　入道の策略で、馬助に歌を盗ませたことがわかったから。
c　馬助の歌を盗んだのではないかと、入道に疑われたから。
d　馬助に歌を盗まれたことを、入道にまで同情されたから。

問十二　傍線部12「用意すべき事か」とあるが、作者はどのような「用意」が必要であると感じているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　和歌は一人でこっそり詠むべきだ。

b　和歌は公開するまで人に知られてはならない。

c　他人の和歌を盗んではならない。

d　他人は一切信用してはならない。

三 次の文章は、『孟子』の中の一章である。これを読んで後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送り仮名を付していないところがある。

滕文公問曰、滕小国也。竭力以事大国、則不得免焉。[1]如之何則可。孟子対曰、昔者大王居邠。狄人侵之。事之以皮幣、不得免焉。事之以犬馬、不得免焉。事之以珠玉、不得免焉。乃属其耆老而告之曰、[A]狄人所欲者、吾土地也。吾聞之也。君子不以其所以養人者害人。[2]二三子、何患乎無君。我将去之。去邠、踰梁山、邑于岐山之下居焉。邠人曰、[B]仁人也。不可失也。従之者如帰市。[5]或曰、世守也。非身之所能為也。[6]效死勿去。君請択於斯二者。[7]

（『孟子』梁恵王下篇）

〈注〉○滕文公－滕は国名。文公はその君主。　○大王－周の大王。　○邠－地名。　○狄－中国北方の異民族。　○皮幣－幣は絹布の類。　○耆老－長老。　○邑－まちを作る。　○岐山－梁山の西方にある山。

問一　傍線部1はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　どうやったら勝てるのか。
b　どういう状態にできるのか。
c　どうしたらよいものか。
d　何か差し出せるものがあるか。

問二　波線部AB「曰」はどこまでかかっているか。それぞれ次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

A　a　吾土地也　　b　何患乎無君　　c　我将去之　　d　邑于岐山之下居焉

B　a　仁人也　　b　不可失也　　c　従之者如帰市

問三　傍線部2について、この場合何をさすか。文中の語を用いて答えるとき、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　大王　　b　耆老　　c　土地　　d　邠人

問四　傍線部3はどういう考え方に立っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　君主はいなければならない。
b　君主はいなくなってもよい。
c　君主はいない方がよい。
d　君主はいなくならなければならない。

問五　傍線部4は何についていうのか。文中の語を用いて答えるとき、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　大王　b　邠　c　土地　d　君子

問六　傍線部5はどういう状態をたとえているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　大勢の人々がどんどん集まってくる状態。
b　どこへでもつき従ってくる状態。
c　反対する者もなく従っている状態。
d　いつものように生活している状態。

問七　傍線部6はどういうことをいっているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分は大王のように行うことはできない、ということ。
b　自分の力量ではどうにもならない、ということ。
c　君主として取るべき態度ではない、ということ。
d　自分一人で勝手にできるものではない、ということ。

問八　傍線部7「斯二者」とは、どういうことをさすか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　滕の地を差し出すことと滕の地を死守すること。

b　文公に従って滕を去ることと滕に残ること。

c　文公を守ることと土地を守ること。

d　人民を守ることと自分の国を守ること。